

パメラ論争におけるヘンデルの『セメレ』と 『ヨセフとその兄弟たち』

高 際 澄 雄

序 ディーンの『ヨセフとその兄弟たち』の評価の不十分さ

ヘンデル研究におけるウィントン・ディーンの業績について、疑義を挟む人は研究者であれば誰もいないであろう。ヘンデル歌劇の特徴と魅力を原理的に論じた *Handel and the Opera Seria* (Berkeley, 1969)、オラトリオの全作品を詳細に論じた *Handel's Dramatic Oratorios and Masques* (Oxford University Press, 1959)、ヘンデルのイタリア歌劇全作品を詳細に論じた *Handel's Operas: 1704-1726* (with J. Merrill Knapp, Oxford University Press, 1987) と *Handel's Operas, 1726-1741* (Boydell Press, 2006) は、ヘンデル研究の金字塔というべき著作である。

だが、ディーンの主張がすべて正しいと考える必要はない。芸術には好みの問題が関わっており、新しい資料の発掘もあり得るからである。

ディーンの『セメレ』評価はヘンデル研究にとって画期的な価値をもっている¹。それまで無視されてきた本作の価値を具体的にしかも詳細に示したのである。

『セメレ』は、初演時に観客から十分に理解を得ることができなかった。最大の理由はヘンデル自身が「オラトリオの形式」と言いながら、セメレとユピテルの恋愛感情を扱った世俗的な内容を扱ったためである、とディーンは言う。

『セメレ』の台本は多くの人にとっては躓きの石となってしまった。イギリス人は、オラトリオと比較したために混乱し、作品をけしからぬ、品位のない、軽薄なものだと考えた。ドイツ人は洗練された表面の下に、象徴主義という鉱脈を探り当てた。古代の感性に共感性をもつヘンデルには、神からの贈り物だと思えたことであろう。他のオラトリオの場合とは違って、

台本作者と仲違いするどころか、完全な共鳴を感じたのである。コングリーヴは『セメレ』の本質的にギリシア的特性、特に演劇的客観性と神と人間の行動を同列に置く表現法、を維持したのである。ユピテルは原子爆弾をもっているかもしれないが、彼の肉体的および感情的欲求は、市井の男の欲求と変わらない。神話は新鮮であり続け、押しつけがましくなく、ギリシア人のいう *hubris* (思い上がり) についての教訓を引き出しているのである²。

オラトリオとは18世紀前半のイギリス人にとって、基本的に聖書の物語を扱う音楽劇であった。ヘンデルはすでに『アレクサンドロスの饗宴』で古代の英雄を扱ってはいるが、歴史であることと聖セシリアに言及することで、オラトリオ形式を使う言い訳はできた。しかし純粋なギリシア神話をオラトリオとして作曲することに、当時のイギリス人は反感をもったのである。

さらに、ヘンデルがイタリア歌劇を書かなかったことも、問題を複雑にしていた。1741年にヘンデルはイタリア歌劇から撤退する決心をしたが、ヘンデルの後を継いだミドルセックス卿は、ヘンデルに歌劇の作曲を要請していた。それをヘンデルが拒絶したため、イタリア歌劇支持の人々からヘンデル攻撃が行われたのである。もともと英語による歌劇としてコングリーヴによって書かれた『セメレ』を、演技ぬきのオラトリオによって表現したことでイギリス人には内容の理解が不可能となってしまった、とディーンは論ずる。しかしこうした18世紀当時の偏見から脱すれば、『セメレ』の卓越性が明らかになると主張し、その証拠に分析を行うのである。

ディーンは最初に人物描写の分析を行う。ディーンが最も高く評価するのがユピテルの妻

ユーノーの人物描写である。彼女は、自己の安定を揺るがす者を許さず、必ず打倒する。その存在感には確かなものがあり、作品の最初から感じられる。一方ユピテルは、雷を武器にする絶対神からはほど遠く、恋する女に欲情を抱く男として描かれている、と言う。

これに対してセメレは「等身大の肖像」として描かれており、ユピテルへの恋愛感情が美しく提示され、眠りの歌によって恋愛と自己だけが彼女にとって大切であることが示されているが故に、彼女が虚栄から失墜すると、観客に衝撃が走るのだ、と分析している。

ディーンの人物描写分析は他の登場人物にも及んでいるが、まとめれば、セメレとユピテルの恋愛に怒ったユーノーの復讐劇としてきわめて人間性豊かな作品となっているので、イギリス人がオラトリオなのだから聖書の物語を扱っていないので無価値であると判断したこと、ドイツ人がワーグナーのような象徴主義的作品であるから価値が高いと評価することは、間違いであると結論している。そして彼はさらに楽曲の詳しい分析を行っている。

ディーンのこの分析評価はきわめて高い説得力をもち、20世紀後半から『セメレ』の優れた上演が行われる基礎となったのである。³

ところが一方でディーンはヘンデルの次作『ヨセフとその兄弟たち』 *Joseph and His Brethren* に対してきわめて厳しい評価を下した。「すべてのオラトリオの中で『デボラ』と『ヨセフとその兄弟たち』は、完璧な失敗作の最短距離に位置している。」⁴

なぜこのような評価を下したのだろうか。ディーンはその理由をジェームズ・ミラー師 the Reverend James Miller の書いた台本にあると述べている。「ミラーはあまりにも学者すぎて、よき台本作家になれなかったのだ。彼はモンタギュー公爵への『ヨセフ』の献辞で次のように書いている。「閣下にはご存じのことでしょうが、この種の演劇公演に使える時間は限られているので、主題を段階的、かつ芸術的に展開し、彼の性格を十分に描写する余地がなかったのです。」言い訳はきわめて不適切である。異常に長いこのオラトリオには、展開と描写の余地があったのだが、ミラー

は常に混乱させ複雑化しているのである。」

しかしながら、台本を分析すれば明らかになるのだが、ミラーは混乱させも、複雑化してもいい。複雑化と見えるのは、展開なのである。例えば、第1幕第2場で給仕長がパノアと呼ばれているが、聖書には名前が与えられていない。しかし劇化するためには具体性がなければならないために、名前を与えたので、複雑化ということはできない。さらに夢解きが行われると、エジプトの民がヨセフを讃える合唱を歌うが、これも聖書にはない。だがオラトリオにとって合唱は重要なので1幕3場で2つの合唱を挿入したのである。これを混乱だと非難することはできないのである。

1幕4場のアセナテの歌唱も同様である。聖書ではヨセフの妻は名前でのみ登場する。しかし『ヨセフとその兄弟たち』では、重要な登場人物として会話をし、歌曲を歌うのである。これも複雑化とは言えない。

第2幕第2場では、ヨセフが子供時代に兄たちから受けた残酷な仕打ち、饑饉のための兄たちのエジプト訪問、シメオンの投獄、兄たちのエジプト再訪の物語が、1場に圧縮され、しかもヨセフの複雑な思いが圧縮表現されている。これも混乱ではなく適切な表現だと考えられるべきである。

こうしてミラーの台本に『ヨセフとその兄弟たち』の欠陥を求めるのは無理であることが分かるであろう。それでは音楽はどうであろうか。

現在の唯一の録音資料である演奏指揮者、ロバート・キングはその冊子で次のように述べている。「この（ほとんど完全な失敗作だという）見解は、大きく台本を基にしている、音楽を基にしているのでは全くない。いつもながら、ヘンデルのアリアと合唱は、変化に富んだ音楽に溢れており、牢獄の場面は演劇的かつ効果的であり、レチタティーヴォとアコンパニャートの作曲は和音創造において色彩豊かであり、幼いベニヤミンの台詞の作曲技法は（無邪気な子供を舞台中央に位置させる昔から使われてきた舞台伝統を躊躇なく使用して）劇場の観客に涙を絞らせたのである。」⁵

キングの音楽に関する分析は正しい。1幕4場のアセナテの歌曲はコロラトゥーラが用いられており、セメレの歌曲に勝るとも劣らない。また結婚を表す行進曲とその後の合唱は明るさを表し

て、牢獄の場面で始まる第1幕の巧みな終結部となっている。また3幕4場のベニヤミンの歌曲が、キングの言うとおり、観客の涙を誘う簡素清純なものであるため、その後の兄たちの改悛、そして一族の繁栄へと続く、転回点となっていることも、特筆すべき箇所である。

キングは音楽のみの評価しか行っていないが、聖書の錯綜して複雑な物語を巧みにまとめ、劇的な盛り上がりを加えたことも、付け加えねばならない⁶。『ヨセフとその兄弟たち』は、ディーンの評価とは異なり、『セメレ』にも比すべき優れた作品なのである。

しかし、これまでの評価で欠けていたことは、なぜヘンデルがこの2作を作曲上演したかという動機に関わる問題である。この点については、イギリス文学史のほぼ常識ともいえる「パメラ論争」を考慮に入れなければならない⁷。

1. パメラ論争

『パメラ』の出版はイギリス文学史上きわめて重要な出来事の一つであった。何より文筆家に小説の制作を促し、19世紀の西洋世界で文学の中心ジャンルに変化させた作品がこの『パメラ』であったのだが、大局を見るのではなく細かく調べることで、その重要性を理解できよう。

『パメラ』が1740年11月6日に出版されてから⁸1年1ヶ月余の1741年12月21日、作者サミュエル・リチャードソン Samuel Richardson に、友人のソロモン・ロウ Solomon Lowe は次のように書いている。あなたは「同業者たちに大きな貢献をされました。ご覧なさい。海賊版、批判本、あら探し本、賞賛本、続編、模倣作品、変形作品その他私の知らないものも含めた印刷で、出版業者たちは大忙しです。」⁹

リチャードソンは徒弟のうち100人に1人しかならないと言われた印刷職人の親方であった。ロウはリチャードソンの出版業界が彼の『パメラ』の出版で仕事が多くなったことに言及しているのである。出版から1年1ヶ月余りで、「正統な6版（フランス語版を含む）にリチャードソン自身が最近出版したばかりの続編。ロンドンとダブリンでは海賊版が出され、新聞での非正統的な続編が掲載中だった。さらに驚くべきは、作品の増刷

ではなく関連作品の出版であった……(略)……リチャードソンは後に、ロウの手紙に触れて、(ロウの言うような作品が)「16作もパメラ物語で生まれたのです。」¹⁰

当時のこれらの手紙から分かる通り、『パメラ』を熱狂的に受け入れた人々がいたことは間違いない。15歳の小間使いが主人に気に入られ、誘惑され、強姦されそうになり、監禁されても、屈することなく貞操を守り続け、ついには主人の求婚を受け入れて、地主の奥様になる、という物語は、イギリス人の多数を形成した下層階級の人々に身近な出来事として感じられたのである。

しかし出自の点だけでみれば、それまでも下層階級の女性を主人公とした散文作品は書かれていた。だがこのような作品では、デフォアの『モル・フランダーズ』に典型的なように、女主人公の数奇な生涯に焦点が当てられていたが、『パメラ』の場合はありふれた小間使いを読者を引きつける手法で描き出したことにその人気の秘密があった。両親に宛てた手紙からなるこの書簡体小説は、重要な状況の中で、「危機的状況の直近まで書き続ける記述法」'writing to the moment'¹¹によって緊迫感が生まれ、人々を引きつけたのである。若い小間使いが、主人の誘惑に抗しきれるのか、強姦されてしまうのか、監禁状態にあってその苦しさには屈しないのか、読者ははらはらしながら、小間使いの感情を直に体験する気持ちにさせたところにこの作品の特筆が存在したのである。

しかも階級制が厳然と存在していたイギリス18世紀にあって、下層階級から上層階級に脱出した女主人公は、下層階級の人々の出世願望を実現した存在として引きつけたのである。イギリスの階級制は階級間に移動を可能にするある程度の柔軟性をもっていた。貴族階級にいても没落していくこともあれば、のちのジェームズ・クックのように、農民の出自でありながら、提督にまで出世することもあった。この下層階級の出世願望を、道徳項目の一つであった淑徳、つまり貞節を守り抜くことによって実現したのである。その熱狂ぶりは、ある村においては、作品の朗読を聞いていた村人がパメラの結婚を祝して、村の教会の鐘を鳴らして祝ったというエピソードに端的に表されている¹²。『パメラ』を徳が巧みに描かれて

いる作品だとして説教に使った牧師も存在した。

13

しかしながら、『パメラ』の副題「淑徳の報い」'Virtue Rewarded' については反対する人々が存在した。上層階級に出世する手段として徳を考えてよいのか。徳は徳として実践されるべきではないのか。こう考えた人々は、『パメラ』を批判した。その代表がヘンリー・フィールディング Henry Fielding であった。彼は『シャメラ』*Shamela*, 1741 で、『パメラ』を次のように茶化した。パメラの本当の名前はシャメラ (sham とはあばずれ女の意) で、彼女はかつて売笑婦であって、主人(『パメラ』では B 氏 Mr B- としか書かれていないが、それを馬鹿殿 Mr Booby とした)を術策で結婚に導いたのだと描いたのである。¹⁴

フィールディングは『シャメラ』を自作だと生涯認めていない。理由としては、その題名に隠されている。『シャメラ・アンドルーズ夫人の生涯に関する弁明』*An Apology for the Life of Mrs. Shamela Andrews* とされていることから判明する通り、フィールディングは『パメラ』をコリー・シバー Colly Cibber が書いたものと思い込んでいたのである。シバーはある意味で 18 世紀 30 年代まで演劇界を支配した演劇人で、1740 年に自伝『コリー・シバーの生涯に関する弁明』*An Apology for the Life of Colly Cibber* を出版した。それを併せて批判する意味で、コニー・キーバー Conny Keyber の作として出版している。おそらくこの勘違いに気づいて以降、『シャメラ』を自作と認めることを潔しとしなかったのであろう。

彼が作品に名前を明らかにした作品は 1742 年出版の『ジョウゼフ・アンドルーズ』であった。この作品は当時の他の作品と同様、長い題名を持っている。『ドン・キホーテの作者セルバンテスの流儀に倣ったジョウゼフ・アンドルーズと友人エイブラハム・アダムズ氏の冒険の物語』*THE History of THE Adventures of Joseph Andrews, And his Friend Mr. Abraham Adams. Written in Imitation of Cervantes, The Author of Don Quixote* ここには単にパメラ批判だけでなく、『パメラ』に対抗する小説形式を作り出したという誇りに満ちた宣言が含まれていた。彼は小説を「散文による喜劇的叙事詩」'comic epic in prose' と呼び、かつて存在し

たという喜劇的叙事詩を散文で表現するのが現代の表現法であり、その創始者がセルバンテスだったというのである。¹⁵

この理論はイギリス小説の一つの伝統となった。滑稽味をもっているということでは、オースティン、ディケンズと受け継がれ、やがては我が国の夏目漱石の初期作品に受け継がれていく。とくにオースティンの初期の 3 作『ノーサンガー僧院』『知性と感性』『高慢と偏見』がキホーテ小説 *Quixotic novels* であったことは強調されねばならない。この 3 作の主人公たちはある考えに取り付かれ、最終的にその考えの間違いであったことに気づき、理性的な行動に戻るという様式で書かれているのである。

『ジョウゼフ・アンドルーズ』が『パメラ』を強く批判しているのは、その貞操観である。フィールディングは伝統的な貞操観をもっていて、貞操はそれ自体で価値があるので、大きな見返りが得られるから重視されるべきだと考えるのは間違っている、と主張したのである。

作品の 4 章から 10 章に集中的に表現されたこの考えは、次のような物語に展開されている。主人公ジョウゼフ・アンドルーズは今やブービー夫人となったパメラの弟で職を求めてロンドンに上京し、パメラの義理の叔父、郷士トマス・ブービーの召使いとして仕えることとなる。21 歳で美しい顔を持つ中背のジョウゼフを、ブービー夫人はすっかり気に入り、ハイパークの散歩では、ジョウゼフと腕を組んで歩いて、他の夫人たちの噂になるほどとなる。そこにブービー氏が死んでしまう。毎日生活のことで夫婦喧嘩していたブービー夫人は、部屋に閉じこもり、トランプ遊びをする 3 人の友人しか入室を許さない。やっと 6 日目になって、ジョウゼフにお茶を持ってこさせ、一糸もまとわぬ姿でベッドに横たわり、好きな女の子はいるのか、女性に誘われたらどうするか、と尋ねる。ジョウゼフは戸惑いながら、パメラに適切な助言をした父の教えに従って神の目に背くことはしないと断言する。彼女のほのめかしに反応しないジョウゼフに怒った夫人はすぐに退去させる。女中を呼ぶ。話をしてみると、彼女が鍵穴から二人の会話を聞いていたことが分かる。そこで、自分の名声を守ることを決意した夫人はジョ

ウゼフを世間に非難されないように首にしようと考え、執事に給金を払って解雇するように申しつける。ところが解雇を言い渡そうと部屋に呼ぶと、ジョウゼフの美貌に再び引きつけられた夫人は誘惑するが、「自分の操を捨てるわけにはいかない」と拒絶する。夫人は「男の操など聞いたこともない」というが、ジョウゼフはパメラの弟として操は守らねばならないのだ、と言って、夫人の激怒を買う。彼は早速追い払われ、給金をもらってブービー家から出発し、ロンドンから故郷に向かうのである。

小説の本体は、この後のロンドンから故郷までの恋人ファーニーと友人のアダムズ牧師との旅における諸事件であるが、全体の枠組みとしてジョウゼフがパメラの弟として描かれたことに大きな眼目がある。『パメラ』の世界が色欲だけで小間使いを見る主人、誘惑や強姦未遂、監禁までされても結婚を申し込まれると受け入れてしまう現金な小間使いで成り立っているのに対して、『ジョウゼフ・アンドルーズ』の世界は、本気で愛し合う若い男女と、二人を滑稽ながら、本気で導こうとする牧師で構成されている。フィールディングは、『パメラ』の人気に対抗して、彼の信ずる理想的人間関係、つまり術策を用いる必要の無い、天真爛漫な人々の集まりを描き出したのである。

ここでなぜパメラの弟がジョウゼフと呼ばれたかに触れておかなければならない。『ジョウゼフ・アンドルーズ』の4章から10章は、聖書の「創世記」第39章6節から20節のヨセフの物語に依拠している。ヨセフは、兄たちによって隊商に売られ、エジプトに連れられていったが、そこで侍衛長に雇われる。しかしその妻がヨセフの美貌に惹かれて誘惑するが、ヨセフが拒絶したために、牢獄に入れられてしまう。フィールディングが主張した通り、貞節が無条件に守られて、見返りを得どころか投獄されてしまう。まさに『パメラ』とは対立する貞節観が聖書に存在したのである。フィールディングはこの古代ユダヤ人の伝えた始祖のエピソードを巧みに現代化したのである。

『パメラ』の出版により、一方で作品を熱烈に支持する人々が生まれると同時に、フィールディングに典型的に見られるように、厳しく批判する人々も現れた。ロウが手紙で指摘し、後にリチャー

ドソン自身が手紙で書いている通り、その表現形態は様々であった。熱心な読者はイギリス国内だけでなく、次第にヨーロッパ全体に及んだ。さらにジャンルを変えて、詩作品に変形したり、演劇に、また歌劇に脚色する人々も生まれた。これに対して、批判も論説、パロディー、小説によって表現された。これらの反応は10年余も続いたため、キーマーとセイバーは、社会全体が関わった論争と捕らえたのである。この把握の仕方は、ヘンデルのオラトリオ、『セメレ』と『ヨセフとその兄弟たち』の理解に新しい光を与えてくれるものである。以下に2作品理解の変化を示したい。

2. 『パメラ』批判としての『セメレ』

『セメレ』には『パメラ』との共通点がある。

第1には、身分違いの恋愛というテーマである。セメレは王女ではあっても、恋する相手は最高神のユピテルであり、この身分は越えることができない。しかし、物語が示す通り、恋愛において2人は対等でもある。それが示されるのは3幕4場でセメレとユピテルが喧嘩をする場面である。最高神でありながら、人間のセメレを力で屈服することができず、セメレの要求に応じざるを得なくなるのである。こうしてパメラが身分違いでありながら、主人と対等に渡り合ったように、セメレも人間でありながら、最高神を自分の要求に従わせることができたのである。身分違いの恋愛は、両作品に最大のテーマとして現れている。

第2の共通点は、パメラも、B-氏も、セメレも、ユピテルも自己中心的であり、恋人の幸せを本当に考えてはいないことである。パメラが貞操を守ろうとしたのは、それが徳であるからか、自分を安売りしないためなのか、また主人に恋をしているのか、ただ小間使いとして職を失わないように主人への義務を果たしているのか、判然としない。はっきりしているのは、彼女が自らの操を守るのに熱心だったことで、それは自己中心的だと見ることも可能である。一方、B-氏も色欲以外にパメラのどこに惹かれたのかが明らかにならない。誘惑しても、強姦しようとしても、監禁しても屈服させることができなかったのも、結婚して手に入れたと見ることも可能である。ここでも彼の自己中心性が浮かび上がる。

セメレも、また自己中心的である。すでに見たように、ディーンは、セメレのユピテルに対する愛が本物であることを高く評価しているが、その愛は相手への配慮に欠けており、ユピテルが最高神として仕事を果たすことさえ非難する収奪性を持っていることも、現実として余すところなく描き出している。これに対して、ユピテルが欲情によってセメレに引きつけられているために、最終的にセメレを破滅させる約束に応じざるを得なくなる。『セメレ』でも、中心人物が自己中心的であることが物語を進行させる力となっているのである。

こうした共通性の上に、批判が展開され、『パメラ』批判作品、つまり当時の表現を使えば *anti-Pamela* を生み出している。これは第1幕最後から始まる。セメレが結婚式の場から驚によって連れ去られてしまう。人々が不思議がっていると、祭司と予言者がセメレの父でテーベの王カドモスに次のように伝える。

Hail Cadmus, hail!
 Jove salutes the Theban king!
 Cease your mourning,
 Joys returning,
 Songs of mirth and triumph sing!
 Hail Cadmus, hail!
 万歳、カドモス、万歳！
 ユピテルがテーベの王に挨拶を送っておられる
 嘆きを止めよ
 喜びが戻ってくる
 大喜びの勝利の歌を歌え
 万歳、カドモス、万歳！

そこに驚の姿をしたユピテルによって宮殿に運ばれたセメレのアリアが聞こえてくる。最後には人々がセメレの歌に和す。

Semele

Endless pleasure, endless love,
 Semele enjoys above!
 On her bosom Jove reclining,
 Useless now his thunder lies;
 To her arms his bolts resigning,

And his lightning to her eyes.

Priests and Augurs

Endless pleasure, endless love

Semele enjoys above!

セメレ

無限の快楽、無限の愛を
 セメレは天上で味わっています
 胸にもたれるユピテル
 その雷はほったらかし
 セメレの腕には電光を
 彼女の目に稲妻をあずけたまま

祭司と予言者

無限の快楽、無限の愛を
 セメレは天上で味わう

だが、無限の快楽と愛が保証されても、死すべき運命にある人間セメレは、安心にはつながらない。しばらくすると彼女は眠れなくなる。

Semele

O sleep, why dost thou leave me,
 Why thy visionary joys remove?
 O sleep, again deceive me,
 To my arms restore my wand'ring love!

セメレ

ああ眠りよ、どうてあなたは私から離れて行く
 の
 どうして幻の喜びを奪い去るの？
 ああ眠りよ、もう一度私をだましてください
 私の腕に遊び歩いている恋人を戻してください

そこにユピテルが帰ってくる。彼は神としてなすべきことがあるので、ずっとセメレのところにとどまれないのだと言う。このように人間の姿をしてはいるけれど、彼は神なのだから人間の男のように裏切ることはないの、心配はないという。その上で次のように歌う。

Jupiter

You are mortal and require
 Time to rest and to repose.
 I was not absent,
 While Love was with thee

I was present:

Love and I are one.

ユピテル

あなたは死ぬべき身の人間だから

休んで眠る時間が必要

私は不在ではなかったのだ

愛の神があなたと一緒にいたのだから

私は実在していたのだ

愛の神と私は同一なのだから

この「おまえは死ぬべき身の人間だ」という言葉が、説得にはつながらず、セメレの不安をかき立てることになる。彼女はこうに人間であることの不安を訴える。

Semele

At my own happiness

I sigh and tremble,

For I am mortal,

Still a woman;

And ever when you leave me,

Though compass'd round with deities

Of Loves and Graces,

A fear invades me,

And conscious of a nature

Far inferior,

I seek for solitude

And shun society.

セメレ

私は自分の幸せに

ため息をつき、震えているのです。

だって、私は死ぬべき身の人間で

さらに女なのですから。

だからあなたが私を離れると

愛の神や美の女神たちに囲まれていても

恐れが私に入り込み

はるかに劣る自分の本性を

意識するので

孤独を求め

人付き合いを避けるのです

セメレとユピテルの問題はここに集約されている。確かに、ユーノーが術策を弄しなければセメレの破滅は起こらなかったのかもしれないのだ

が、それでセメレの不安が取り除けて幸せになれるとは思われない。こうしてユーノーによって引き起こされた夫婦喧嘩もどきの口喧嘩から、セメレはユピテルの神としての姿を見ることになり、電光に撃たれて死ぬ。

ユピテルが自分の神の姿を見せる約束をしてしまったときの彼の台詞は笑わせる。

Jupiter (pensive and dejected)

Ah, whither is she gone! unhappy fair?

Why did she wish, why did I rashly swear?

'Tis past, 'tis past recall,

She must a victim fall.

Anon when I appear

The mighty thunderer,

Arm'd with inevitable fire,

She needs must instantly expire.

'Tis past, 'tis past recall,

She must a victim fall.

My softest lightning yet I'll try,

And mildest melting bolt apply;

In vain, for she was fram'd to prove

None but the lambent flames of love.

'Tis past, 'tis past recall,

She must a victim fall.

ユピテル (悲しげに、落胆して)

ああ、彼女はどこに行ってしまったのか、不幸な美女よ！

ああ、なぜ彼女は望んだのか、なぜ私は軽率に約束してしまったのか？

終わってしまった、もう戻せない

彼女は犠牲に倒れなければならない

もうすぐ私が強力な雷神となって

逃れることのできない火で

武装して姿を現すと

彼女は一瞬にして消滅しなければならない。

彼女は犠牲者として倒れねばならない。

でももっとも穏やかな柔らかな稲妻を使おう。

無駄だ。彼女の体は

愛のゆらめく炎だけでできている。

終わってしまった、戻せない

彼女は犠牲に倒れなければならない。

セメレ自身も、ユピテルが雷鳴を伴いながら近づいてくると、自らの愚かさに気づく。

Semele

Ah me! Too late I now repent

My pride and impious vanity.

He comes! Far off his lightnings scorch me,

Ah, I feel my life consuming:

I burn, I burn, I faint, for pity I implore,

Oh help, oh help, I can no more!

She dies. The cloud bursts, and Semele with the palace instantly disappears.

セメレ

ああ、なんということ！遅すぎるけど、後悔しているわ。

自分は高慢で、どうしようもないほど虚栄に満ちていた。

あの方がやって来る！遠くても電光で焦げそう。

ああ、命が消えていくのを感じる。

焼けていく、焼けていく、気が遠くなる、哀れみをお願いします。

ああ、助けて、ああ、助けて、もうだめだわ。
彼女は死ぬ。雲が裂け、セメレと宮殿が一瞬で消える。

こうしてセメレとユピテルの愛の物語は悲劇的な結末を迎える。この根本的な原因は、セメレが人間でありながら最高神ユピテルに恋い焦がれ、ユピテルも欲情に突き動かされてセメルを宮殿に住まわせたこと、つまり、セメレの思い上がり(hubris)とユピテルの女性の無理解にあることが分かる。これは、『パメラ』を『ジョウゼフ・アンドルーズ』において批判したヘンリー・フィールディングの批判の視点と同じである。パメラは社会的に上昇した以上の幸せを手に入れたのか、B-氏は欲情以上の動機で結婚したのか、小説『パメラ』では不明であり、ここが大きな問題であることを『パメラ』批判者は表明していた。『セメレ』も『パメラ』批判作品 anti-Pamelaであったのである。

3. 『パメラ』批判としての『ヨセフとその兄弟たち』

『ヨセフとその兄弟たち』は、ヘンリー・フィールディングの『ジョウゼフ・アンドルーズ』と同じく、聖書の「創世記」のヨセフの物語、つまり「創世記」第37章から第47章に依拠している。すでに述べたように、この長く、複雑な物語は、台本作者ジェームズ・ミラーによって適切に圧縮され、変更されて、オラトリオ台本として巧みにまとめられた。しかも変更箇所をよく見れば、そこにこそ、『パメラ』批判が表現されているのである。

作品は、ヨセフが閉じ込められている獄屋の場面から開始する。フィールディングは、ヨセフの物語を使って『パメラ』のパロディーを作り上げたが、ミラーは獄屋から始めることによって、すでに侍衛長の妻の誘惑を拒否して、投獄されたことを示し、暗に『ジョウゼフ・アンドルーズ』のパロディーを思い起こさせ、さらに『パメラ』批判へと進んでいく。

Joseph, reclining in a melancholy posture

Be firm, my soul, nor faint beneath

Affliction's galling chains!

When crown'd with conscious virtue's wreath,

The shackled captive reigns.

Joseph, starting up

But wherefore thus? Whence, Heav'n, these bitter bonds?

Are these the just rewards of stubborn virtue?

Is this contagious cell the due abode

Of too much innocence? Down, down, proud heart,

Nor blindly question the behest of Heav'n!

These chastisements are just, for some wise end

Are all the partial ills allotted man.

ヨセフ 憂鬱そうな姿勢で寄りかかりながら

固くあれ、我が魂よ、苦しみの

腹立たしい鎖に卒倒することなかれ！

徳の花輪を頭にさせられていることを意識すれば、

足かせをはめられた囚われ人も王となれるのだ。

ヨセフ 立ち上がり

でもなぜこのようになったのか？神よ、なぜにこのように苦しい枷を？

これらが強固な徳の正しい報いなのですか？
この不潔な独房が完全に潔白な者に
ふさわしい住処なのですか？高慢な心よ、もっ
ともっと謙れ。
神の命令を盲目的に疑ってはならない！
この罰は正当なのだ。すべての不公正な悪は
賢い目的のために人に与えられるのだ。

ここに徳、すなわちパメラのいう操が語られ、
さらにその見返り（reward）が言及される。ま
さにこのアリアと伴奏付きレチタティーヴォで、
フィールディングのパロディー部分が示唆される
のである。獄屋場面で始まり、一般に知られる小
説の一部を暗示するという手法は、このオラトリ
オが優れた作品であることを示す大切な証拠の一
つである。

ヨセフはエジプトのパロの夢解きを行い、その
功績によって、全国のつかさとなり、祭司ボタペ
ラの娘アセナテを妻とする。聖書ではアセナテは
名前で言及されるだけであるが、『ヨセフとその
兄弟たち』では、きわめて重要な登場人物とされ、
美しいアリアが配置されている。彼女の最初のア
リアはヨセフ賛美を内容としている。

Asenath

O lovely youth, with wisdom crown'd,
Where ev'ry charm has place!
What breast so firm was ever found,
As could resist such grace?
If thou hast stol'n my virgin heart,
To me in change thy own impart.

アセナテ

ああ、知恵の冠を持つ美しい若者よ、
あなたにはあらゆる魅力が溢れている！
このような優美さにどのような固き胸が
抗することができるのか？
もしも私の清き心を奪ったのなら、
あなたの心を交換に私に下さい。

これに対して、ヨセフは彼女に次のように応え
る。

Joseph

Fair Asenath,
I've asked thee of thy father, and the king,
To help allay the anxious toils of grandeur,
And smooth the rugged brow of public care.
Yet, authoriz'd by both, I dread my fate,
Till thy own voice has fix'd my destiny.

ヨセフ

美しいアセナテよ、
あなたの父上と王に、大きな仕事の苦労を和ら
げ、
眉根を寄せた公務の心配をぬぐい去るように、
あなたを求め、
お二人には許可を得たが、あなたの声で私の運
命を
決めて下さるまで、私は恐れています。

ここに描かれているのは、互いの美質を認め合
う男女の求婚行動である。これ自体が、結婚に至
るまでにこのような信頼関係を築かなかった『パ
メラ』の主人公たちへの批判になっている。

さらにアセナテは、ヨセフの子供たちを生んで
から、次のように歌う。

Asenath

Together, lovely innocents, grow up,
Link'd in eternal chains of brother-love!
For you mayn't envy bear her pois'nous cup,
Nor hate her unrelenting armour prove.

アセナテ

愛らしくて無邪気な子どもたちよ、兄弟愛に永
遠に結ばれて
一緒に大きくなりなさい。
あなたたちには妬みの毒ある杯が運ばれません
ように
嫌悪の情け容赦のない鎧で身を固めることがあ
りませんように。

これは、ヨセフが兄弟に捨てられたことに密か
に言及するとともに、ヨセフの家族が愛に溢れて
おり、新しい社会の出発となっていることを示し
たものである。

ヨセフの行政者としての優越性は、長兄シメオ
ンに対する態度に見られる。ヨセフの兄弟たちが、

故郷の饑饉で助けを求めに来たとき、一番幼いベニヤミンがいけないことを見て取り、彼を連れてくるまで助けない、と言って返すが、人質として長兄シメオンを残すように命ずる。そのシメオンが獄屋に繋がれて、なかなか戻ってこない兄弟たちが呪った時、ヨセフに対して犯した自分たちの罪を思い出し、次のように歌う。

Simeon

Remorse, confusion, horror, fear,

Ye vultures of the guilty breast!

Now furies, now she feels you here,

Who gnaw her most, when most distressed.

シメオン

悔恨、混乱、戦慄、恐怖、

おまえたち罪深き胸を食い破るものよ。

さあ復讐の女神たちよ。今その胸はここにそなたたちを感じている。

胸が一番苦しむときに、もっとも食い入るものよ。

この歌詞にヘンデルは魅力的な音楽付けを行った。さらに、ヨセフは幸せな子ども時代を思い起こし、故郷の生活を次のように歌う。

Joseph

The peasant tastes the sweets of life,

Unwounded by its cares;

No courtly craft, no public strife

His humble soul ensnares.

But grandeur's bulky noisy joys

No true contentment give;

Whilst fancy craves, possession cloy,

We die thus whilst we live.

ヨセフ

農夫は心配に痛められぬ

人生の甘美さを味わう。

宮廷の悪知恵も公共の紛争も

農夫の素朴な魂を罠でとらえることはない。

だが王侯のかさばるやかましい楽しみは

本物の満足を与えることはなく、

幻想は求め、所有は飽きさせ、

こんな人生を送っているうちに、私たちは死ぬ

のだ。

この歌詞への音楽付けは繊細極まりない。パストラルの簡素でしかも微妙な和声変化がヨセフの故郷への思いを巧みに表現している。この部分が第2幕の頂点を形成している。

第3幕では、嫉妬をペリカンに例えた有名な歌詞が現れる。

Asenath

Ah jealousy, thou pelican,

That prey'st upon thy parent's bleeding heart!

Though born of love, love's greatest bane,

Still cruel, wounding her with her own heart.

アセナテ

ああ嫉妬、血を流す親の心を

餌食にする、おまえペリカンよ！

愛から生まれながら、愛の最大の破滅者、いつも残酷で、自分の心で愛を傷つける。

幼い頃兄弟たちに捨てられたヨセフは心にトラウマを抱えている。そのためシメオンにも再度エジプトに来た兄弟たちにも素直に名乗り出ることのできないヨセフと、自分たちの過去の罪がいつか暴かれるのではないかと恐れる兄弟たちとの複雑な関係がこの歌詞とその音楽に巧みに表現されている。

『ヨセフとその兄弟たち』ではこの錯綜した関係が、ベニヤミンの素朴な嘆きによって解決に導かれる。ヨセフは、ベニヤミンを保護するために、銀食器泥棒の名目で逮捕を命じ、シメオンのみを父親ヤコブの元に帰そうとする。それを知ったベニヤミンはこのように語る。

Benjamin

What, without me? Ah, how return in peace!

What can you say, what comfort can you yield

To the distracted parent? O unhappy,

Unhappy Benjamin! Thou at thy birth

Gav'st death unto thy mother, and now dying,

Thou likewise tak'st thy tender father's life.

ベニヤミン

何ですって、私を連れずに？ ああ、どうして穏

やかに帰れるでしょう！
 どうしておっしゃれるのですか？苦しんでおられるお父様に
 どんな慰めを与えられるのでしょうか？ああ不幸な
 不幸なベニヤミン！生まれるときには
 お母様に死を与え、そして瀕死の今に、
 同じようにやさしいお父様の命を奪うとは。

この嘆きは何よりベニヤミンの兄たちの心をとらえる。ついに長兄シメオンはヨセフにどんな刑も自分が引き受けるから、ベニヤミンを解放してくれと嘆願する。ヨセフはこの兄弟愛に感動し、幼い時に彼らに捨てられたヨセフであり、もはや恨みを持っていないと告げる。兄弟たちは互いに和解し、ヨセフとアセナテは夫婦の絆をさらに強めて、最後に全員で次のように合唱する。

Chorus

We will rejoice in thy salvation, and
 triumph in the name of the Lord our God.

Hallelujah!

合唱

私たちの神、主の御名における救いと勝利を喜びます。ハレルヤ

この合唱は堂々としたハレルヤによって結ばれる。

『ヨセフとその兄弟たち』は、『シャメラ』や『セメレ』が『パメラ』の批判をすることによってパメラ論争に関係したのとは異なり、『ジョウゼフ・アンドルーズ』と同じように、『パメラ』と対抗する社会観、人間観を提示することによってこの論争に参加したのである。ヨセフはパメラと同じように苦難に遭遇するが、最終的には心の傷を自らの成長によって克服し、十全な人間関係を築いていく。『ヨセフとその兄弟たち』は重要な anti-Pamela なのである。

結び ジェームズ・ハリスの役割

18 世紀前半期の音楽界と文学界の 2 人の巨匠、ヘンデルとフィールディングはパメラ論争におい

て偶然同じ批判側に所属したのであろうか。

年齢から考えれば、ヘンデルはフィールディングの 22 歳も年上で、フィールディングが 4 歳の時に『リナルド』の作曲公演でロンドンデビューを果たして、音楽界での不動の地位を確立し、さらに 1720 年代には王立音楽アカデミーのための作曲公演で傑作イタリア歌劇を次々に発表した。彼はフィールディングとは、世代的にも活躍の場も異なっていて、交わる機会が無かったのではないかと思われるが、実際には違う。

ヘンデルは、ドイツで生まれ、イタリアで音楽修行をした経験から、ヨーロッパ全体に情報網を回らせていて、流行の変化に敏感であった。したがってフィールディングが若くして演劇界で新しい潮流を作ったことで自らの作曲公演に影響を及ぼしたことを理解していた。

ヘンデルとフィールディングが対面したことは無いようだが、2 人はジェームズ・ハリスによって結ばれていた。ハリスは音楽の愛好家で、特にヘンデルを好み、ソールズベリーの自宅で音楽会を催し、何回かヘンデルを自宅に招いている。そしてヘンデルのイタリア歌劇公演、オラトリオ公演に出かけている。

一方、フィールディングは弁護士となってから仕事でハリスの家に立ち寄ることがあり、1740 年代に手紙を交わし合う仲となっていた。ハリスにはフィールディングの死後に書かれた「治安判事ヘンリー・フィールディングの生涯と天才に関する試論」‘An Essay on the Life and Genius of Henry Fielding Esqr.’¹⁶ が自筆原稿として残されている。ハリスはフィールディングと文学を論じていたので、この試論にパメラ論争が書かれていなかったとしても、『ジョウゼフ・アンドルーズ』の意図をよく承知していたであろうから、それがヘンデルに伝わった可能性はきわめて大きい。

恐らくヘンデルとしては『セメレ』と『ヨセフとその兄弟たち』を組として構想したのであろう。ヘンデルと台本作者たち（『セメレ』の原作はコングリーヴであるが、オラトリオとして作曲されるために変更が加えられており、ニューバラ・ハミルトンがその変更を行ったと推測されている）は、一定の理解のもとに制作を始めたことが、上

記の分析結果から推察される。そして『セメレ』がディーンを理解したように、当時の一般聴衆に受け入れられていれば、作者たちの意図は伝わったことであろう。

しかし偉大な芸術作品が発表時に社会に受け入れられないという現象は、この2作品に限って起きることではない。ヘンデルの代表作『メサイア』であっても、ロンドンにおいては公演当初、聖書の物語を演劇場で演奏したことが非難され、受け入れられるまでには孤児養育院での演奏会というヘンデルの慈善活動が必要だったのである。とりわけ、上演芸術には優れた上演が不可欠である。幸いなことに、20世紀になって、『セメレ』にはいくつかの特筆すべき演奏が行われ、『ヨセフとその兄弟たち』もロバート・キングの優れた演奏がCDによって記録されている。残された作業は、この2作品を当時のパメラ論争の文脈に入れて、さらに内容理解を深化させることである。

¹ Winton Dean, *Handel's Dramatic Oratorios and Masques* (Oxford University Press, 1959) Chapter 16 *Semele* を参照のこと。

² 同書 p.370.

³ CD では John Eliot Gardiner (Erato 1993) Christian Cruyn(Chandos 2009)、歌劇形式での上演を記録したDVD では William Christie (Decca 2009) が優れている。

⁴ Dean 上掲書第17章 *Joseph and His Brethren* を参照のこと。

⁵ Robert King, English Booklet of the CD *Joseph and His Brethren* (hyperion 2000) p.7.

⁶ 台本の詳しい分析については、高際澄雄「『ヨセフとその兄弟たち』における詩と音楽」(『宇都宮大学国際学部研究論集』第26号(2006年)を参照のこと。Leslie M. M. Robarts 'Joseph and His Brethren' *The Cambridge Handel Encyclopedia* (Cambridge University Press, 2013) には新しい分析がある。

⁷ Thomas Keymer and Peter Sabot, Ed. *The Pamela Controversy: Criticisms and adaptations of Samuel Richardson's Pamela 1740-1750*. Vols. 1-5 (Picerking and Chatto, 2001) は重要な文書をリプリントしている。その解説が重要である。

⁸ T. C. Duncan Eaves and Ben D. Kimpel, *Samuel Richardson: A Biography* (Clarendon Press, Oxford, 1971) p. 91.

⁹ 同書 Vol. 1 p. xiii.

¹⁰ 同書 Vol. 1 p. xiv.

¹¹ 同書 Vol. 1 p. xiv.

¹² 桜庭信之「サミュエル・リチャードソン」『イギリス18世紀』(大修館 1975年)

¹³ Keymer and Sabot, 上掲書 Vol. 1 p. xiii.

¹⁴ テクストには、Martin C. Battestin, *Joseph Andrews & Shamela* (Methuen, 1965) を使用した。

¹⁵ 'Authors Preface', *Joseph Andrews*, pp. 7-12.

¹⁶ Clive Probyn, *The Social Humanist: The Life and Works of James Harris 1690-1780* (Clarendon Press, Oxford, 1991) を参照のこと。

テキスト

Batestin, Martin C. Ed. *Joseph Andrews & Shamela*, Methuen 1965.

English booklet of the CD *Joseph and His Brethren*, hyperion 2000.

English booklet the CD *Semele*, Chandos 2009

参考書誌

Burrows, Donald, Duncan, Rosemary, *Music and Theatre in Handel's World: The Family Papers of James Harris 1732-1780*, Oxford University Press, 2002.

Eaves, Duncan, Kimpel, Ben D., *Samuel Richardson: A Biography*, Clarendon Press, Oxford, 1971.

Keymer, Thomas, Sabot, Peter Ed. *The Pamela Controversy: Criticisms and adaptations of Samuel Richardson's Pamela 1740-1750*. Vols. 1-5, Picerking and Chatto, 2001.

Ladgat, Annet, Vickers, David, *The Cambridge Handel Encyclopedia*, Cambridge University Press, 2013.

Probyn, Clive, *The Sociable Humanist: The Life and Works of James Harris 1690-1780- Provincial and Metropolitan Culture in Eighteenth-century England*, Clarendon Press, Oxford, 1991.

高際澄雄「『ヨセフとその兄弟たち』における詩と音楽」,『宇都宮大学国際学部研究論集』第26号,2006年.

Handel's *Semele* and *Joseph and His Brethren* in the Context of Pamela Controversy

TAKAGIWA Sumio

Abstract

Winton Dean argued that *Semele* had been neglected without its artistic value considered. It was composed as an oratorio, which led to the misunderstanding of its content. Handel had little prejudice on Greek myths, and he was sympathetic on the tragedy of the heroine. It was a work full of humanity, but the 18th century English people thought the oratorio should treat only Biblical stories.

Dean's reevaluation was remarkable in the history of the study of Handel's works. However, his evaluation of the next oratorio, *Joseph and His Brethren*, saying that "Of all the oratorios *Deborah* and *Joseph* come nearest to complete failure,....." is unacceptable.

This view is corrected by putting both works, *Semele* and *Joseph and His Brethren*, in the context of Pamela controversy in this paper.

After the publication of *Pamela*, English society argued on whether it is a good work or not. Some people passionately supported *Pamela* and should be an example of female behavior. On the other hand, some people argued virtue should be kept, not for a reward, but for itself.

Henry Fielding was a prominent critic of *Pamela*, producing *Shamela* and *Joseph and Andrews*.

This paper claims that Handel's *Semele* and *Joseph and His Brethren* were also criticisms of *Pamela*, or anti-Pamelas, like Fielding's *Shamela* and *Joseph Andrews*.

(2015 年 11 月 2 日受理)